

『皇帝への税金』

聖書 マタイによる福音書 22 章 15～22 節 讃美歌 10 13

説教 森田幸男牧師

私たちがこの正午礼拝において最近読んでいるところを読む時に、イエス様のたとえ話であれ、イエス様のどのようなお言葉であれ、それがどういう時、所で語られたものであるか、その状況というものの大切さということに注意してまいりました。

今日のところは話の中身としては、「皇帝への税金」のことが問題になっているのであります。ところで、この事が問題になっている時、所はどのような状況であったかと言いますと、これは過越祭の最中の事だということです。つまり、イエス様にとっては最後の週ですね。日曜日に過越祭でエルサレム集った人たちは、イエス様を、“この人こそ神が遣わされたまことの預言者、この人が我々を救ってくれるメシアかもしれない”という大きな期待を持って歓迎したわけでした。そういう過越祭でありますから、エルサレムの空気というのは、それこそ昨日の東京は39度2分という記録的な暑さでしたが、それよりももっと空気は熱っぽくなっていた。しかもエルサレムの神殿の境内という場であります。

そしてイエス様に、「皇帝に税金を納めるのは律法(神様の教え)に適っているでしょうか、適っていないでしょうか」と問うたのであります。しかもその前口上が、イエス様を逃がさないように、「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです。ところで、どうお思いでしょうか、お教えてください」とこのようにあります。この「人々を分け隔てなさらない」というのは、ローマの皇帝であろうが祭司長であろうが、誰であろうがあなたは分け隔てをしない。人の顔を恐れないということですね。

これを問うた人はいったい誰で、その動機は何か。15節「それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、罠にかけようかと相談した。」その前の譬え話についても決定的に糾弾されていて、そのまま放置すれば彼らの立場は全くなくなってしまうわけです。何としてでもその言葉じりを罠にかけてとらえて、亡き者にしたいということでもあります。そしてファリサイ派は集まって知恵をしぼったのです。そして16節を見ますと、「そして、その弟子たちをヘロデ派の人々と一緒にイエスのところに遣わして尋ねさせた」と書いてあります。ヘロデ派というのはヘロデ大王の一派で、エルサレムを含めてパレスチナを政治的に治めているローマの傀儡政権と言ったらいいような、つまりローマに操られた政治家の一族、一党です。これは従って「親ローマ」であり、それに対してファリサイ派というのは教義的なことはともかく、一口で言えば「反口

ーマ」です。ですからファリサイ派とヘロデ党は日ごろから政治的には相容れないもので、一つになるということは考えられない両派であります。ところが彼らが一緒になってイエス様のところに行ったということです。いろんな違いはあるけれども、今はイエスさまは彼らの共通の敵ですから、そういう決定的とも言うべき溝を越えて一致団結して陥れようとして、難題をイエス様に突きつけたということでもあります。もし「皇帝に税金を納めるべきだ」と答えるならば、これはイスラエルの民の感情には合致しません。イスラエルの人たちの信仰というのは、自分たちをすべての意味において、宗教的であれ政治的であれ、自分たちをお治めになるのはただ一人の神様であるというのが、時代を貫いてユダヤ人の精神の根底を貫いている根本的確信です。今はやむをえずローマの支配を受けているけれども、これは時至って神がくつがえしてくださるという信仰、信念を持っている国民ですから、ローマに税金を納めることを、勿論快く思っていないわけです。ですから「納めるべきである」と答えると、民衆の心はイエス様から離れて行く。また、「それは我々の信仰にたって納めるべきではない」と答えるならば、これはローマの支配に盾突くということで、これもまた、ただでは済まない。そういうどちらに答えても、それを口実にその言葉によってイエス様を亡き者にすることができるという魂胆で問いを発したわけであります。

先ほど、状況ということを申しましたが、過越祭というのは、神によるエジプト帝国での奴隷状態からの救出、解放を記念する祭りであります。その記念を通して、神様への感謝と信仰の決意を新たにするというのが祭りであり、特に過越祭の意味であります。そして先ほど申しましたように、イスラエルの民にとっては、「我々の神こそは唯一の神であり、その神の御支配、その教えが全世界、全国民に及ぶことこそ、人間にとっての喜びであり幸いであり、またそこにこそ世界にとっての真の平和がある。我々イスラエルの使命は、この神を信じ、この神の教えに従い、全世界の全国民に証しすることである」という使命感を持ち、またその思いを新たにすることがこの祭りであり、中でもこの過越祭を祭ることの意義でありました。そういう中でこの税金問答が起こってきたのであります。

当時の税金というのは、イスラエルの人たちにとってどういうことになっていたかと言うと、ローマに納めるべき税金、これはいつの時代でも似たようなもので、所謂我々の言う「不動産税」というのが土地に対してあり、彼らにとっては農地であることが多いのですが、それは穀物の一割とぶどう酒の二割、つまり収穫の穀物の10%とぶどう酒の20%を土地の代償として納めなければいけない。「所得税」は収入の1%ということで、そしてすべての人に共通にかけられる「人頭税」というのがあって、これは男の場合は14歳以上、女の場合は12歳以上、65歳までで、一デナリ（一日の労働者の賃金）、これはローマに納めないといけない。またイスラエルの人であれば、宮への献金というものがあって、半シケル、約二デナリ（二日分の賃金相当のもの）を宮へ納めなければならないということで、かなり厳しく重い税金と献金とがあったわけであります。

そういう状況の中で、「皇帝に税金を納めるのは律法に適っているでしょうか。適ってい

ないでしょうか」とこう問うたのに対して、イエス様は彼らの悪意に気づいて、『偽善者たち、なぜ、わたしを試そうとするのか。税金に納めるお金を見せなさい』と言われますと彼らはデナリオン銀貨を持って来た。デナリオンというのはローマの銀貨です。イエス様は、「この銀貨に刻まれているのはだれの肖像と銘か」と聞かれたのであります。すると彼らは、「皇帝、カイザルのものです」と答えるほかありません。お金というのはそれを発行して経済の流通で有効な範囲が、その王なり、支配者の実際の支配領域ということになりますね。するとイエス様は、「では、皇帝のものなら皇帝に返しなさい」と言われました。これは言うならば、「税金を納めなさい」という意味でもあります。

イエス様は、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と答えられたのであります。「皇帝のものは皇帝に」というのは、もうデナリ銀貨を見せてのことですから、「その一デナリを人頭税として納めなさい」ということではありますが、「神のものは神に返しなさい」ということは、これは「宮への納入金二デナリ相当を納めなさい」という意味ではありません。勿論その否定も含んでいるわけではありませんが、前に見ましたが、宮に納めるのはこのデナリ銀貨では駄目なので、ユダヤの通貨でないといけないのです。世界的にはこのデナリ銀貨が行き渡っているわけで、過越祭には全世界から巡礼団を組んでやって来るわけで、外貨を持って来るわけですが、宮に納める時にはユダヤのお金に換えて献金しなければならない。その時に両替料を取る。この両替料がべらぼうに高かった。神殿当局はそういう両替料を非常に高く取って、荒稼ぎしていたのです。そんな実態を見抜いてイエス様は、21章の12節以下に書かれている、いわゆる「宮清め」をなさったのです。13節にこうありました。『わたしの家（神殿）は、祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしている」というので、両替人の台とか、犠牲の動物を売っているそういう者の腰掛を倒されたということがありました。これがその後、今日のところに至るまで、エルサレムの宮清めをなし、そして、たとえ話しをもって、彼らは、本当は神を畏れないで、ローマの顔を見て、そして外面は信仰深い者のような顔をしながら、民衆の顔をうかがっている偽善者だと言われたのです。

どんな問題でも本気で問うならば、どういう立場からであっても、立場を越えて真面目に対応をすればいいのですが、彼らは言葉の上では真面目そうで、自分たちにとって真剣な課題ではあるけれども、本当の所はイエス様の言葉じりをとらえて罨にかけるとというのが本音の意図なんですね。たちが悪いのです。それに対してイエス様はデナリオン銀貨を見せて、「これはだれの肖像と銘か。」「これは皇帝のものです。」「ならば皇帝のものは皇帝に返しなさい。神のものは神に返しなさい」と言われました。

この「神のものは神に返しなさい」というのが、イエス様が宮清めを含めて、このエルサレム当局の祭司長、律法学者、長老たちに本当に言いたかったことなのであります。そしてすべての人に言いたいことなのです。今日この聖書を読む我々に対してもイエス様がおっしゃりたいことは、「神のものは神に返しなさい」と、こういうことなのです。そして

このお言葉の真意は何か。デナリオン銀貨には皇帝の肖像と銘が刻まれています。それを踏まえて、「あなたがたには神の像と神の銘が刻まれているのだ」というのが背景にあるわけです。

「律法」というのは聖書のことですが、創世記の1章26～27節にこういう言葉がありました。「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を作ろう。』」「神は御自分にかたどって人を創造された。」つまり、我々人間には神の像が刻まれているわけです。ならば、「神のものは神に返しなさい」というのは、「あなたがたには神の像、神の名が刻まれているのだから、その身も心もすべて神にささげなさい。正にその事こそあなたがたのなすべきことであり、なしていないことだ」ということが、宮清め以来の譬えなどでイエス様が言い続けてこられたことなのであります。

いろんな状況、損得がある中で、私たちが自分自身のすべてを本当に神様に返す、神に捧げる。それが信仰であります。私たちはそれを求められているのです。先週の礼拝で私たちは、アリマタヤのヨセフはローマの最高議会のメンバーでしたけれども、死刑になったイエス様のその遺体引き取り方を願い出て自分所有の新しい墓に納めたという箇所を読みました。これは命がけなんですね。そしてそこに信仰があるのです。

そういう点で、私たちもこの世の政治には良い政治も悪い政治もありますが、それ相応の税金を納めるというのは国民の義務ですから、それはしなければならぬと思います。けれどもその事も含めて、本当に神を恐れ、神を信じ、その教えに適うように自分自身の全存在を捧げ、そしてそれが政治の世界であろうが、経済の世界であろうが、教育の世界であろうが、あらゆるところで神様の善き御心が成っていくことになるように、私たちがものも言い、行動もする。それがキリスト者の信仰であります。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」というイエス様のお言葉はそういう信仰を我々に求めておられるのであります。

お祈りいたします。

神様。私たちは本当にイエス様が初代の教会に対し、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、吐き出そうとおっしゃったことがあります。私たちが自らを省みて、そのような者であり、また、あなたを恐れ、あなたに従うことよりも、自分の関心事や、自分の立場や、身分や、生活の安泰や、そういうことに専ら意を用いることの多いことを思い知らされます。どうか、日々の生活においてあなたを信じ、あなたの御心に適う歩みを選び取って、あなたの御心が成ることに仕えることができるようにさせてください。

この祈り、イエス様の御名を通し御前におささげいたします。アーメン